

河岸 唱平

飯島周『カレル・チャペック 小さな国の大きな作家』（平凡社新書、2015年）



カレル・チャペック生誕 125 周年にあたる 2015 年は、本邦でも記念シンポジウムが催され、さらに飯島周先生の新著『カレル・チャペック 小さな国の大きな作家』（平凡社新書）が刊行されるなど、チャペック研究をめぐって活発な動きがみられた。

本稿で取り扱うこの文献は、日本で書かれたチャペックに関するモノグラフとしては二番めのものとなる。第一のものは千野栄一『ポケットのなかのチャペック』（晶文社、1975）であり、まだ作品の翻訳紹介も充分でない時期でありながら既に、創作はもとより評論集・書簡の類に至るまでチャペックの著作の全容を紹介しようとした先駆的な業績であった。しかし当時は共産党政権による統制のため文献へのアクセスに不都合があったため未解明のままの部分も残されていたし、全巻を通じて一貫した構成を持たないエッセイであることが評伝あるいは概説書としての便宜をいささか損ねていることも確かであった。ともあれ千野のチャペック論が、当時米国のハーキンス、ソ連のニコルスキー、チェコのプリアーネクといった東西陣営のチャペック研究者がそれぞれの立場でもっていた政治的な見かたに縛られず、早くから作家の真価を（文明の危機への警鐘ではなく）人間それ自体への愛に見出していた点は注目に値する。飯島も述べている通り、現在本国チェコを除けば世界で最もチャペックを愛読する国は日本であると言われているが（9 頁）、それはこの作家の普遍的価値が早くから指摘されていたことと無関係ではないだろう。

さて、平凡社新書の一卷として刊行された本書は、一般の読書界に向けた概説書の体裁ではあるが、研究者が参照するに値する充実した内容を持っている。著者である飯島周は、これまで長編小説『絶対製造工場』『ホルドゥバル』『平凡な人生』および多数のエッセイ・旅行記を広く訳出してきた日本のチャペック翻訳の第一人者であり、その文学と人物像を現代の光の下に明らかにする概説の書き手として最適任者といえるだろう。

本書は主に全四章からなり、それに詳細な年譜と文献表が添えられている。第一章「世に出るまで」では、チャペック兄弟の生い立ちと後年の作品に活かされることになる幼少期のさまざまな経験が紹介され、文名を上げる以前の彼らについて知るには最適の手引となっている。チャペックのコスモポリタンの文学活動のバックボーンとして西欧の言語文化に関する知識は重要な役割を持っているが、それを彼が習得した過程が詳細に述べられているのがとりわけ興味深い。第二章「ジャーナリスト、作家として」では、新聞社に勤めるジャーナリストとなり、並行して作家として名を成してからチャペックの仕事を追う。両方の領域にまたがる彼の活動が「日常的ないわば平凡な現象の背後に潜む一種の普遍性を洞察する力」（35 頁）によって深められていった過程を、著者はチャペックの伝記的事実と主だった作品・ジャンルの傾向をつぶさに追って明らかにする。チャペックの創作における活動領域は SF、児童文学、旅行記とさまざまであったが、各々の表層の底には一貫して身近なものへの関心や素朴な人間愛が通底していたことを著者は指摘する。今日の目にとりわけ興味深いのは、チャペックが文化人としていかに政治と関わりを持ったかを明かす一節だ。チェコスロヴァキア初代大統領マサリクの思想に共鳴して政治的コミットメントを行ったチャペックであるが、彼は強権的なイデオロギーに原理・理想を委ねるのを良しとせず、個人の生活と仕事のなか、周辺の人々との関係性の中にそれを見出したいと願った。社会が寛容性を次第に失いファシズムの到来に至るまでの時代をチャペックがいかに苦闘したかを

著者は詳細に追っていく。現代において平和を損なう動きがまたも繰り返されることに危惧を抱く者にとって、戦間期のチャペックの活動の軌跡を知ることから得るものは大きいのではあるまいか。第三章「趣味に生きる」は、チャペックの私生活における趣味と、それを元とするエッセイ等について扱っている。例えばチャペックの飼った犬や猫、園芸、日本への関心等について微細に紹介され、作品の源泉となった事物の実際について知るには好適である〔なお余談ながら、この節に『山椒魚戦争』に出てくるあやしい日本語〕として引用されている図版（204 頁）は、評者の推測では宇賀伊津緒訳『人造人間』（春秋社、1923）からの引き写しである。文書の一行目は、宇賀訳書の扉にある「米国にて」「人造人間」「宇賀伊津緒訳」という文言の不完全な転写であると解説できる〕。第四章「カレルの周辺の人たち」では、遺された書簡や、兄ヨゼフ、妻オルガ、友人（サイフェルト、ランゲル）らが遺した回想録中のカレルの姿を紹介する。身近な人物がカレルについて書いた回想は多数刊行されているが、本章にはそれらの要所が集成され、あたかもチャペックが小説で用いた手法のようであり、多面的な作家像を浮かび上がらせることに成功している。

本書の全体を通じて、著者は作家チャペックの生涯と作品の原点が人間に対する興味にあり、それが「人間性についての深い認識へと進み、さらに人間性の尊重と擁護にまで発展」（8 頁）したことを説得的に論じ、その普遍性を指摘してこう述べている。「カレル・チャペック——この小さな国の大きな作家は、平凡であろうとしてついに平凡になりきれなかった非凡な人だった。そしてそれが、国家や民族を超えたこの作家の魅力の根源なのかもしれない。」（240 頁）

評者が一読して驚いたのは、三百頁に満たない新書版でありながら、チャペックについて内外の膨大な研究成果を引きつつ余さず概説されている内容の充実ぶりである。それでいて文章と構成は一般の幅広い読書家にも届く平明なものであり、多数の親しまれる訳業を手がけてきた著者の面目躍如たる名著であるといえよう。チャペックに関するこれほどの概説書は世界でも類を見ないはずであり、今後チャペックを論考しようとする者にとって最良の基本文献となるだろう。